
魔法先生ネギま！ーある転生者の物語ー

メガエルメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま――ある転生者の物語――

【Nコード】

N 8 1 3 6 Y

【作者名】

メガエルメス

【あらすじ】

とても平凡な暮らしを送ってきた東雲海翔>しのめかいとく。
彼は不運(?)な死を遂げ、ネギまの世界に転生する。
平凡だった青年の送るバトルコメディー！(のハズ)

本作品はネギまの二次小説であり、作者の処女作です。
生暖かい目で見守って頂けると幸いです。

本作品は転生物です。

最初から最強ではありません。

ハーレムになるかどうかわかりません。が、ネギまである以上なる可能性は高いと思います。

そして作者は運動部4人組が大好きです（略）

第0話（前書き）

初投稿。

顔から火が出るほど恥ずかしい。
感想とか……あれば待ってます。

11/30 改行修正

第0話

「……何処だここは。」

目が覚めると、見慣れた自分の部屋とはかけ離れた白い空間にいた。“いた”という表現はもしかしたら正しくないかもしれない。と、言うのも、自分がそこに存在しているかどうかさえ確認できないからだ。

俺の名前は東雲 海翔、高校2年生だ。

対して目立つ存在でもなく、可もなく不可もなく高校生活を送っている。

どちらかというとりア充氏ね、とか言ってしまうタイプのグループに属してはいるが、皆気のいい奴等で高校生活に不満はなかった。両親は海外で仕事をしていて、一人暮らしをしている。

とまあ俺の自己紹介も程々に、今の状況を冷静に考えねばならんだろう。

辺りを見渡す、白い。そして他に何も無い。

「夢だろうか……？」

「残念ながら、夢ではありません。」

いきなり虚空から女性の声が降りてきた。

「誰だっ!？」

「驚かせて申し訳ありません。私この世界を管理しておりますアテ

ネ、と言います。」

「アテネさん……か。」

とりあえず会話が出来る存在がいて助かった。

「アテネで構いません。東雲海翔さんですね？」

「あ、はい。俺も海翔でいいですよ。」

「では海翔、落ち着いて聞いて下さいね？貴方には、転生をして頂きたいと考えています。」

……へっ？

「……はい？転生？」

「そうです、転生です。」

「……ごめん頭が追いつかない。まず、俺は死んだってこと？」

「貴方が今まで生きてきた世界ではそうなりますね。」

なかなかの衝撃的事実。

「マジか……。じゃあ次、どうして死んだ？一応昨日寝る前までは

健康体だったと思うんだけど。」

「はぁ……。やっぱり気が付いてなかったんですね。」

「うえ！？俺なんかしちゃったわけ？」

「貴方昨日友達と秋刀魚のパーティーしてたでしょう？」

うつ、なぜ知ってる。

「それはもう盛り上がりましたね？七輪の火に気が回らないくらいに。」

「え”っ、じゃあ俺が死んだ理由って……。」

「火の不始末による一酸化炭素中毒死です。」

「……。」

アホだ……。なんちゅうアホだ……。

「そんなアホな最期を迎えてしまった貴方に、心優しい私がもう一度生のチャンスを与えてあげるといつてるんです。ほら、崇めなさい讃えなさい。」

「えっ、突然の変わり身……。」

「……コホン、ということで貴方には転生をして頂きます。」

「それはどうも……。」

「感謝が小さい!」

「えっ、」

「はっ! い、いえいえどういたしまして。」

「いや、もう遅いよ。アンタそっちが本当のキャラだろ。」

「ち、違いますよ? 違いますからね?」

弁解しているアテネはさておき、これは大変なことになった。転生か……、また0歳からやり直してことか。

「あ、海翔が想像している転生とはちょっと違います。」

「へ? だって転生だろ?」

「はい。転生といっても、海翔の場合、前世の記憶や肉体を継続したまま平行世界に召還という形で転生になります。」

「平行世界?」

「簡単に言えば漫画やアニメといった空想の世界のことですね。」

これはまた衝撃的発言。

「……そんなのバトル漫画とかだったらすぐまた死んじゃうんじゃないの?」

「はい。ですから海翔の願いを3つ程叶えて差し上げます。」

おお、これは結構重要になるな。

「ちなみに俺の転生する世界は聞けるの？」

「はい。“魔法先生ネギま！”の世界ですね。」

「えっ、ガチじゃんあれ。」

「ガチですね。」

「……。」

これは3つが相当重要になってくるぞ。

ただ、あまり強すぎる力は持ちたくない。だって絶対人生面白くなるし。

「そうだな……。BLEACHの斬魄刀が一つ欲しい。」

「既存のですか？」

「いや、オリジナルのがいいな。」

「どんな能力にします？」

「んー、戦闘が出来ればどんなでもいいや。」

「随分適当ですね。」

「うつさい。次は修行に比例して強くなれる力が欲しい。」

「ふむふむ、堅実的ですね。」

「最後に、俺の他の転生者を俺と同じ世界に送り込まないで欲しいな。」

「……それは何故？」

少しアテネの雰囲気が変わった気がした。

「俺がこんな曖昧な理由で転生させて貰えたんだ、他の転生者がいてもおかしくないし、なによりそんな奴等を相手にするのが面倒臭いだけだよ。」

「ふふつ、意外と鋭いんですね。」

「な、なんだよいきなり笑うなよ。」

「いえいえすみません。では、準備が整いましたので転生させますね。」

「おう、ありがとな。」

「また、お会いしましょう。」

視界が一気に暗転した。

「東雲海翔君ですか……。少し興味が沸いてしまいましたね。」

第0話（後書き）

海翔君の斬魄刀の能力は作中で明らかにします。

後、チート能力はアテネさんが一つだけやらかしました。

バトル描写はたぶん苦手。orz

修行前の無双だけはやらかさないように注意します。

それでは、次回もよろしくお願いします。

第1話（前書き）

海翔君の口調が安定してない気がする……！

容姿等の主人公設定は後書きに記載します。

第1話

「ここは……？」

目が覚めると、木造の小屋のような部屋のベッドで寝ていた。

「む？起きたか。」

これは……、もしや……っ！

「金髪幼女降臨……っ！」

「誰が幼女だッ！」

フランス人形のような幼女とエンカウントしました。

第1話 金髪幼女との遭遇

いやいやいやいや、違っただろ普通。

いきなりエヴァンジェリンはねーって！

一人転生して強くなっただけから原作キャラじゃねーのか？
いやそんなことよりも今はこの気難しい幼女様のご機嫌を損ねない
ようにだな……。

「――…っおい！返事をせんか貴様！」

「あ、すみません、考え事してました！」

ヤバいぞなんか既に「ご立腹そうだ。」

「全く……。まあ今はいい。それより貴様、何故あんな処で倒れていた？」

「へ？倒れてた？」

「？ ああ、その森の中でな。もしかして貴様、記憶がないのか？」

変に嘘重なるよりそういうことにした方が楽かな？
どうせ麻帆良にいた記憶無いんだし。

「そう……みたいっすね。助けて頂いたみたいで、有難う御座います。」

「気にするな。それより、貴様が倒れていた傍らにこの刀が落ちていたのだが、これは貴様のか？」

エヴァンジェリンが指したのは、装飾のあまりない一振りの刀だ。
おお、恐らくあれが俺の斬魄刀かな？

「恐らくそうっすね……。」

「これを見ても記憶は戻らないのか？」

「残念ながら戻りそうもないっすね。」

戻る記憶が無いんだけどな。

先程からエヴァンジェリンからピリピリと殺気が感じられる。

そりゃそうか、訳のわからない男が記憶喪失と言っているんだ、怪しまない方がおかしい。

「覚えていることはあるのか？」

「名前と……、年齢くらいっすかね。」

「名前はなんという？」

「東雲海翔と言います。17歳っす。」

「そうか……。」

どうやら思案に入ってしまったようだ。

ただ、一応俺も確認しておきたいことがある。

「あの、質問いいっすか？」

「ん、ああ、構わないぞ。」

「ここは何処ですかね？」

「麻帆良学園という学園都市だ。このログハウスはその敷地内にある私の家だ。」

改めて聞くと見た目幼女が一軒家持っているのもシュールな話だ。

「何か言ったか？」

「いえっ、何も？」

流石に鋭い。失言には気を付けなくては……。

「では次に、貴女とその後ろの方は？」

「ああ、自己紹介がまだだったな。私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。こいつの名前は絡繰茶々丸。私の従者だ。」

「よろしくお願いします。東雲海翔様。」

「エヴァンジェリンさんと絡繰さんっすね。」

「エヴァでいい。こいつも茶々丸と呼んでやれ。」

「なら俺も海翔でいいっすよ。」

「そしてその気色悪い敬語もどきをやめろ。どうせ素ではないのだから。」

「あちゃー、バレた？」

「最初から気付いている。……まあ、貴様の態度を見る限り出し抜こうとはしていないみたいだな。刀は返しておこうか。」

「あ、どうも。」

「ところで貴様、刀を持っていながら剣術すら覚えていないのか？」

「そんなことをやってた記憶はないな。」

「そうか。」

「その、剣術とか修めてないと危険な地域なのか？この麻帆良学園
つてのは。」

「そうだな……。まあ良い、記憶が戻るかもしれないしな、話して
やろう。」

エヴァは魔法の存在や麻帆良という地域、魔法生徒、先生がいるこ
となど色々話してくれた。

そりゃまあ知ってるけどさ……。ここがないと修行とか出来なさそ
うじゃん。

「——…とまあ、大まかに言えばそんなところだ。」

「魔法……。か、すまん、まだ記憶は戻らなそうだな。」

「そうか……。ところで貴様、この学園の警備員をする気はないか
？」

エヴァの目がキラッと光った、ような気がした。

「警備員って……。だから俺は剣術も魔法も使えないんだって。」

「勿論剣術も講師をつけてやる。魔法だって私が教えてやろう。貴
様が強くなれば堂々サボれると言っわけだ。」

「おい！最後本音出てるぞ！」

「いいではないか。貴様もこの世界を渡っていける力を手に入れることが出来るんだぞ？」

「むう、それもそうか……。」

「では決まりだな！来い！じじい共に紹介してやるぞ！」

「じじい共？」

「先程話した学園長のじじいだ。奴等に話さえ通せば私も心置きなく貴様を魔改……鍛えてやる事が出来るわけだ。」

「今魔改造っていいかけたぞっ！やっぱり俺やめるからな！」

「ええい煩いつ！黙って着いてこい！」

「そんな説得の仕方があるかああああ……！」

そして俺は引き摺られて学園長室に向かうのだった。

エヴァが海翔を連れて出ていった後のログハウス。

「あんなに楽しそうなマスターは久し振りに見ました……。海翔さん、マスターをよろしくお願いしますね。」

第1話（後書き）

東雲 海翔 （17）

性別：まごうことなき男

誕生日、血液型：8 / 23 O型

性格：基本的に明るい。し、ノリはいい方なので相手のノリに合わせたキヤラになったりする。

死んだきっかけである秋刀魚パーティーでも皆に合わせてとっても疲れたために火を消し忘れた。

容姿：黒髪、黒眼。純粋な日本人である。

自身では全く自覚がないようだが中々の容姿をしている。

そのため、前世で通っていた高校では性格も相まって彼に憧れる女子はいた。

彼に彼女がいなかったのは恋愛に興味がなかったからである。

ただ、周りからはリア充氏ねと言われていたことなど彼知らない。

備考：中学、高校と陸上部に所属。

遠距離を主にやっていたため、持久力には自信がある。

成績は中の上。平均をちょっと上回るくらいのところにいつもいる。

どちらかというと理系。けどあくまで“どちらかというと”であり、その差はあまりない。

と、言うことで海翔君の設定です。

戦闘能力はまだ皆無。陸上のスタミナがあるくらいです。

それでは、次話でお会いしましょう。

第2話（前書き）

調子良く第2話投稿。

丁度良い場所で毎回切っていくので話の長さは前後する可能性があります。

11/30 改行修正

第2話

「なんで女子中学校に学園長室があんの？」

「……、考えたこともなかったな。」

エヴァと俺は女子中学校の中にある学園長室の前に来ていた。

第2話 妖怪・頭長爺とダンディー教師

あの後、真っ直ぐに女子中学校に向かうエヴァを追いかけるながら、

“何で女子校に男がいるんだという視線” 攻撃に耐え、やっと学園長室まで辿り着いた。

ちなみに効果は抜群である。

「邪魔するぞ。」

ノックもせずに学園長室にズカズカ入り込んでいくエヴァ。

漫画のような効果音をつけるならそれは“ババーン”だろう。

「フォッ、そちらから訪ねてくるなど珍しいのう。」

「フン、そんなことはどうでもいい。会わせたい男がいる。」

「ふむ……？」

「入れ。」

エヴァの合図を聞き届け、学園長室に入る。

「お邪魔します。」

そして初めて目の当たりにする学園長（頭部）。
長い、そしてナガイ。

「はじめまして、東雲海翔と言います。」

「この麻帆良学園の長である近衛近右衛門じゃ。」

簡単に自己紹介を終える。

っていつかこの人頭も特徴的だけど、名前も十分特徴的だよな。

「東の方の森で拾ったのだ。どうやら記憶喪失らしくてな、名前と年齢しか覚えていなかった。」

「ふむ……。」

髭に手を伸ばし、何やら思案する学園長。

「その腰にさした刀は？」

「俺のつぼいんですけど、剣術も何もやっていた覚えがなくて……。」

斬魄刀は手に持っても変なので腰にさしてある。

あつ、来る途中の視線はこれも原因か！

「ちなみに魔法の存在についてはもう話してあるぞ。」

「フォツ！？それはちと早計過ぎやしないかのう。」

「フン、刀を傍らに森の中で倒れていたのだ、以前は魔法関係者と判断した。極悪人だろうとも私には関係の無い話だしな。」

「そういうことを軽々しくして欲しくないんだがのう……。」

ニヤリと笑うエヴァと頂垂れる学園長。
実に対照的である。

「さて、報告だけをしに来た訳でもないのだ。」

「というと？」

「コイツを鍛えて警備員にしてやろうと思ってな。」

「……なんじゃと？」

片目を見開き驚く学園長。

「何、コイツと話してみたが悪い奴ではない。恐らく貴様が心配しているようなこともないだろう。」

先程から俺の自由意思がない。まあ強くなれるのなら俺としては構わないが。

「しかしのう……。」

「いいではないか。警備員の頭数が増えるのだぞ？」

「むう……。」

その後も学園長の説得を続けるエヴァ。

だけどこれは説得って言うより軽い恐喝である。

「……まあ、よいか。その代わり、記憶が戻ったら必ず報告に来ること、よいな？」

「あ、はい、わかりました。」

戻る記憶が無いんだけどな……。ってこれ前もいった気がする。

「折角これだけ立派な刀も持っているのだし、剣術の稽古もつけたい。葛葉刀子あたり借りられないか？」

「ふむ……、刀子君は教師もやっているからの、時間的に厳しいかもしれない。頼むなら桜咲君に頼むといい。」

「よし、わかった。」

流れるように俺の処遇が決まっていく。

不満は無いんだけどな。

「これから儂等とも付き合いが増えていくじやろつ。高畑君にも会わせておきたいのじゃがよいかの？」

「なんだ、タカミチのやついたのか。」

「俺は全然構わないっすよ。」

「では、少々待っておれ。」

呼び出しの校内放送があり数分後、高畑さんは現れた。
渋い、そしてシブい。

「学園長、何用でしょうか。」

「何、エヴァが記憶喪失の少年を連れてきての、これから警備員として鍛えると言うんで会わせておきたかったのじゃ。」

「え……。大丈夫なですか？」

高畑さんは此方を伺うように見る。まあ当然であるが。

エヴァは二度も同じ説明をするのは面倒だ、という態度を示しているし、俺が説明したところで逆効果だ。

したがって学園長が説明することになり、これまでの経緯を伝えた。

「——…と言っことじゃ。」

「……成る程、理解しました。」

すると、高畑さんは手を差し伸べてきた。

「東雲海翔君……だね。この麻帆良学園の教師と広域指導員をしている高畑・T・タカミチだ。よろしくね。」

「よろしくお願いします。」

差し出された手をつちり握る。

「タカミチ、桜咲に放課後私のログハウスに来るよう伝えておいてくれ。」

「わかりました。海翔君、僕に出来ることがあればいつでも呼んでくれ。」

「はい、ありがとうございます。」

「では、ログハウスに戻るぞ。」

「エヴァンジェリン、貴女はもう少し真面目に授業を受けてください……。」

その頃の2-A。高畑が学園長室に呼ばれ、自習となっている。

「ねえねえ、学園長室にイケメンが来てるらしいよ!」

「「な、なんだってー!?!」」

「友達から聞いたんだけど、黒髪、黒眼の男の子だって!」

「しかもエヴァンジェリンさんと一緒に歩いてたらしいよ!」

「なん……だと……!？」

「エヴァちゃんにもついに春が!!」

「学校をサボってまでの逢瀬とはやるなエヴァちゃん!」

「ねえねえ誰か見た人いないのー!？」

「（こいつらなんでここまで盛り上げれるんだ……。）」

「（バカばつかです……。）」

その後、戻った高畑に壮絶な質問攻めがあったらしい。

第3話（前書き）

エヴァの地獄のレッスン……はまだ始まらない。

11 / 30 後続設定にて矛盾発生。加筆修正
改行修正

第3話

「一軒家の中にリゾート……だと……!?!」

「いちいち面倒臭い反応をするなッ!」

そう、俺は今エヴァの別荘に来ている。

第3話 吸血鬼>エヴァ<の授業!

ログハウスに戻ってすぐ、エヴァは別荘とやらを取り出してきた。

「この中では外の一時間が中の一日となる。魔力も充満しているから修行には最適であろう。」

「へえー、こんなの持つてるとは流石真祖の吸血鬼>ハイ・デイライトウォーカー<。」

「フハハハ! 思い知ったか!」

「いや、何をだよ。」

「ケケケ、御主人ゴ機嫌ダナ。」

こいつの名前はチャチャゼロ。エヴァが最初に従者にした呪われた

殺戮人形だ。

俺が目覚めた時には寝てたらしい。

「ええいうるさい！とにかく入るぞ！」

「あいよー。」

エヴァに連れられて別荘に入る。

そこでまあ、冒頭の会話と言っわけだ。

「では、修行を始める。これから私のことは師匠>マスター<と呼べ。」

「えー……、嫌だ。」

「何で断るんだッ！」

「大体俺が頼んで師事してるわけでもないし、最初にエヴァって呼べっていったのエヴァじゃん。」

「ぬぐっ……。まあいい、今まで通りエヴァと呼ぶがいい。」

エヴァは一つ咳払いをして続けた。

「いいか、まず、魔法とは森羅万象の力を精神力で従え、それを一点に集束して打ち出すものだと考えればいい。」

「森羅万象っていうと、火や水とかか。」

「そうだ。まずは貴様の魔法資質を見るために初歩的な魔法を教えてやるう。プラクテ ビギ・ナル——」

『火よ灯れ』

何処からか用意した練習用の杖の先から、ライター程の火が灯る。

「ほら、やってみる。」

「ふむ、わかった。プラクテ ビギ・ナル——」

『火よ灯れ』

俺が呪文を唱えた瞬間、ブオオツと勢いをたてて火というより炎が燃え上がった。

杖の先がエヴァと俺の間にあつたのがいけなかったのだ、燃え上がった炎は俺とエヴァの頭を焼いた。

結果、コントのようなアフロヘアな二人が見つめあうことに。

「……貴様の魔法資質はよくわかった。」

「……うん、すまん。」

二人でアフロヘアーを直す。ギャグ補正？なにそれおいしいの？その後、気を取り直したエヴァの講義は続く。

「魔力や魔法を使うイメージは問題ないようだな。では次は属性を見るか。」

「属性？」

「森羅万象と言ったところで色々あるだろう。代表的な攻撃魔法として良く使われる属性は、光 炎 水 雷 風、そして私の得意な闇 氷などがポピュラーだな。」

「今付けた火が燃え上がったのは俺が炎属性だから？」

「そうかもしれんな。よし、では最も扱いやすい攻撃魔法『魔法の射手』だ。氷の矢の見本を見せてやる。」

『魔法の射手 氷の10矢』！！

エヴァの放つ魔法の矢が遠くの海に突き刺さる。

「貴様の魔力量を考えると10矢くらいは余裕だろう。光からやってみる。――」

結論からいうと、俺の属性は光と炎だった。
光の魔法なんて原作だと『魔法の射手』くらいしか見ないんだが、

大丈夫かな？

「おお、そうだ、魔法を使うには始動キーというものが必要なのを忘れていた。」

「そっぴやあつたな、そんなの。」

「じゃあなんで『魔法の射手』撃てたんだ？

「『魔法の射手』は簡単な術式だからな。始動キー無しで発動してもおかしくない。」

「へー。そんでその始動キーってのは何でもいいわけ？」

「そうだな。私のだとリク・ラク ラ・ラック ライラック、だ。」

「ふーむ……。」

「まあすぐに決めなくてもいい。言いやすい言い回しを考えておけ。」

「おう、わかった。」

「今まで教えたことは魔法の基礎だ。しっかりと胸に留めておけ。」

「俺は一つ頷く。するとエヴァもよし、と頷いて続きを話し出した。」

「次は魔法の種類だ。一口に魔法と言っても色々な種類がある。」

「『魔法の射手』は攻撃魔法だったよな？」

「そうだ。風は捕縛という役割も果たすがな。」

「で、どんな種類があんの？」

「簡単に分けると攻撃魔法と補助魔法だ。補助魔法には更に、回復魔法、強化魔法、結界魔法、捕縛魔法、転移魔法などがある。呪いも補助の一部だろうな。」

「結構多いんだなあ。」

「だからといって攻撃魔法しか修行をしなかったりすると、攻撃パターンが規則化してしまう。補助魔法も上手く使うのが上級者の戦いかただ。」

「成る程ね……。」

「戦闘において何が強くて何が弱い、という優劣はないのだ。」

「じゃあエヴァも？」

「私はまず不老不死というアドバンテージがあるために、あまり補助魔法を必要としないのだ。」

「へえー。」

「魔法に関してはこれで大体終わりだな。教えることがあったらその都度教えていこう。一息つくか。」

空の開けた広場から別荘内に移動する。

どうやら茶々丸が紅茶を淹れてくれたみたいだ。

「お砂糖は何杯要りますか？」

「あ、じゃあ1杯で。」

「畏まりました。」

やはり行儀のいい人>ロボくだ。一家に一台ほしいな。

「さて、次は気についてだ。」

「気……か。」

「これはまた魔力とは別物でな、魔力が自然の力とするなら、気とは自身の力の結晶のようなものだ。」

エヴァは紅茶を口に含みながら続ける。

「基本的にこの二つを合わせることは出来ない。一つ方法があるがこれはまだ早いだろう。」

恐らく咸卦法のことだろうな。

「気は長い間修練すれば体得出来るという。この辺は桜咲の方が詳しいだろうがな。」

「要するに長い間修行してきた人が見せることが出来るオーラみたいなものか？」

「そういうことだろうな。」

紅茶を飲み干したところでエヴァは一拍いれた。

「今日はこんなところでいいだろう。呪文を教えるのはまた今度、剣術や身体捌きなどは桜咲から吸収していけ。」

「よっしゃ、じゃあそろそろ寝るかー。」

「おい、さも当然のように私のベッドで寝るな！降りろ！」

「エヴァンジェリン……。僕もう眠いんだ……。。」

「訳のわからないことを言いながら寝ようとするんじゃない！起きろー！」

「マスター、楽しそうですね？」

「ケケケ、ソウダナ。」

第3話（後書き）

という訳で魔法導入部分でした。
次回はやっとなせちゃんが登場。どうなることやら。

感想有難うございました！
とても励みになります！

では、まだ次話でお会いしましょう。

第4話（前書き）

この話でアテネのやらかしたチート発覚。
そして徐々にギャグ化。いや、苦手なシリアスになるより全然良い。

神鳴流に関して少しの独自解釈有り。

けどなるべく原作に近付けたつもりです。

11 / 30 改行修正

第4話

放課後、エヴァのログハウスを訪ねる一人の人影があった。

「エヴァンジェリンさん……。あまりクラスでも交流はないはずなんだけど、何で呼ばれたんだろう……。」

彼女の名は桜咲刹那。麻帆良で警備員もやっている対魔の剣士だ。高畑からの伝言を受け取ったようだが、公衆の面前でその内容は伝えられなかったようだ。

「うっ……。緊張するなあ。」

第4話 刹那の授業！そして明かされる新事実

別荘から出て、エヴァに借りた魔法の呪文の本と格闘していたら、扉がノックされた。

「開いてるぞ。」

「し、失礼します。」

現れたのは桜咲刹那、これから俺が剣術指導を受けるであろう剣士だ。

「そちらの方は……？」

俺を見ながら言う刹那。

「なんだタカミチの奴説明しなかったのか？」

「はい、放課後に外れにあるログハウスにエヴァンジェリンさんが呼んでるとだけしか……。」

「全然説明しとらんじゃないか！」

「えっと、公衆の前でしたので、裏の話なら考慮して控えられたのかと……。」

いきなり大声を出したエヴァに驚きながらも、わたわたと高畑さんのフォローをしている。

「えーっと、俺の名は東雲海翔。麻帆良の森でエヴァに拾われた記憶喪失の少年ってやつだ、よろしくな。」

「あ、はい、桜咲刹那です。よろしくお願いします。」

「あー、順を追って説明してくとだな……。」

今度は俺が説明する番らしい。

エヴァは露骨に嫌な顔してるしな。

「——…とまあ、こう言うことだ。」

「つまり、私に剣術の稽古をつけてほしいと？」

「そういうことになるね。」

「一応神鳴流は京都に伝わる由緒正しい流派なのですが……。」

「いいではないか、貴様にも弟子が出来るのだぞ?」

「弟子……。」

刹那さん?そこで揺れちゃうのか?

俺は俺でエヴァに突っ込みたい俺と、突っ込めば講師が得られないぞ!という俺の二人が俺のなかで葛藤を続けている。

「……わかりました、やりましょう。」

数分後そこにいたのは、弟子という響きに洗脳された俺の講師だった。

「ここは……、すごいところですね……。」

「俺も最初はビビった。」

「まだ一回しか来ていないだろう。」

そこ突っ込むなよ!初めてじゃない人のリアクション見て優越に浸ってもいいだろう!

「何を落ち込んでいるんだ、さつさと来い。」

「この短期間で俺の扱い上手くなりましたね!？」

「あの、修行しないんですか？」

「ハイ、しません。」

中央に移動する。刹那の授業が始ま……る前に、

「はい、せんせーい。」

「な、なんですか？」

「先生のことはなんて呼べばいいですかー。」

「へ？ええつと……、し、師匠、とか？」

「はい、わかりましたー。」

「おい貴様！私の時は露骨に断ったじゃないか！」

中で休んでたエヴァが飛んできた。なんて地獄耳。

「よく考えてみるよ！戸惑った表情、そして上目遣いで『し、師匠、とか？』って言われて見ろよ！断れるわけないだろ！」

「……………それもそうだな、失礼した。」

「いや、わかってくれればいいんだ。」

「あの、私凄く恥ずかしいんですが……。」

エヴァのギャグスキルが上がったようだ。よきかなよきかな。

「呼び方も決まったところで、始めてくれ、師匠。」

「ナチュラルにスルーしないでくださいよ!？」

「え?何を?師匠が上目遣いで《し、師匠、とか?》って言うてきたこと?」

「それはスルーしてくださいよっ!？」

恥ずかしさで壊れた師匠を宥める。

これじゃいつまでも授業が始まらないじゃないか。誰のせいだ。あ、俺のせいかな。

「全くもう……、いいですか?始めますよ?」

「お願いします、師匠。」

「まず、日本には数多くの流派がありますが、その中で私の修めている神鳴流を、海翔さんに教えようと思います。」

「神鳴流か……。」

「流派を修めると言うことは、流派を知ると言うこと。型や奥義より先に、神鳴流について少しお話しします。」

成る程。前世でも格式高い道場と言うものはこう言うことも学んでいたんだろうな。

「神鳴流とは、神の鳴る、と書いて“しんめい”と読みます。神鳴流は古くから対魔の剣として栄え、裏の世界で活躍してきました。」

「対魔の剣……。」

「はい、神鳴流の奥義には気を剣にのせて繰り出すので、対魔として戦うことが出来るのです。」

「気、ね。少しエヴァからも聞いたな。」

「そうなんですか？なら少しは聞いていますか、気と言うものは長年の修行から成るもので、一朝一夕で習得出来るものではありません。」

「らしいね。」

これについては俺の修行次第だ。
魔法は外の力だが、気は内の力。根気強くやっていかないとな。

「さて、じゃあ次は型ですかね。」

「基本的にどの流派にも型つてものはあるよね。」

「そうですねえ、じゃあ簡単なものからやっていきましょか。――」

竹刀を取りだし、型のレクチャーを受ける。
一通り教わったところで師匠の前で実演する。

「飲み込みがとても早いですね……。まだぎこちないですが、型は完璧です。」

「お、ホントに？」

「ハイ、この調子で型は全て覚えてしまってください。そしたら立ち回り稽古に入りますから。」

「やっと本格的になつてきたねえ。」

「やっと、何て言いますけど異常なほど早いですよ？1日で型をマスターなんて聞いたことありませんし。」

「へえー、そうなのか。」

「さて、今日はこれくらいにしておきましょう。型が完璧になったら次のステップです。」

「おう、わかった。」

師匠と共にエヴァのいる室内に戻る。
中にはだらけきったエヴァがいた。

「んー？終わったのかー？」

「おう、一段落したぞ。」

「そうかー。」

ソファアのへりにぐにゃーんとしなだれかかるエヴァ。
最近の言葉を借りるなら“たれエヴァ”だろう。

「どうかしたのか？」

「んー、血が足りなくて力が出ないのだー。」

「ア。パンマンか、お前は。」

「血、ですか？」

「ああ、エヴァは真祖の吸血鬼だからな。」

「海翔ー、貴様の血を吸わせろー。」

「初めて名前呼んだと思ったらこんなときかよ。まったく、仕方ないな。貧血にならない程度で頼むぞ？」

エヴァに右手を差し出す。

エヴァはその手首噛みつき、血を吸いだした。

が、目を見開きすぐに口を離すと、ガバツと後ずさった。

「……どうした？そんな不味かったか？」

「海翔……、貴様……、」

珍しく驚愕の表情を浮かべ、小刻みに震えている。

そして、エヴァの口から衝撃の発言が飛び出してきた。

「貴様、真祖の吸血鬼>ハイ・デイルイトウォーカー<だったのか？」

「……は？」

俺はすぐに言葉を返せなかった。

第4話（後書き）

と言うわけで海翔君は真祖の吸血鬼でした！

魔力量が多かったのもこれが原因でした。

酷いチートデスネ。アテネさん何をしてんだ。

誤字脱字、またはこのキャラこいつのことこう呼んではないないだろ

う！といったツツコミはどしどし受付中です。

発見次第、感想フォームにてお知らせ下さい。

それでは、次話でお会いしましょう。

第5話（前書き）

展開が早く感じたので、改行技術にチャレンジ。
これまでの話も修正いれるかもしれません。

吸血鬼設定に独自解釈有り。

第5話

「ペロ……、これは真祖の吸血鬼……！」

「シリアスな流れを止めるんじゃない！」

第5話 吸血鬼の転生者

「真祖の吸血鬼って……、俺が？」

「そうだ。他に誰がいる。」

師匠が……、と言おうとしたが、エヴァがいつになく真剣なので自重する。

「えっと、エヴァンジェリンさんは何故海翔さんが吸血鬼だとわかったのですか？」

「吸血鬼は、というより私は、なんだが、血を吸うときに大体の種族はわかるものなのだ。」

「味とかで、か？」

「それもある。が、血に混じる魔力の質等判断材料は色々あるがな。」

一度好奇心で自分の血を舐めてみたことがある。……飲めたものなんかじゃなかったけどな。海翔のそれは私と同質のものだ。」

「……。」

少しの間沈黙が支配する。それを破ったのはエヴァの口だった。

「桜咲、少しコイツと話がしたい。席を外してくれるか。」

「は、はい、わかりました。」

師匠が席を外す。その間も、エヴァは何やらぶつぶつと呟いていた。

「海翔、少し昔話をしてやる。——」

それはエヴァの苦難の過去の話だった。

その中で、エヴァを吸血鬼にした張本人はその場で殺したハズで、俺が吸血鬼である理由がわからない、と。

もし、俺が先に吸血鬼になっていたのなら、今度は自分が吸血鬼になる理由がわからない、との話だった。

「——…と言うことだ。その後私はナギに封印され、ここで警備員などをやらされるハメになってしまったのだ。」

最後の台詞にはとても感情が込もっているように聞こえた。エヴァが俺に警備員を任せたいというのも納得できる。

「……そうか、そんな話聞かされちゃ俺も話さない訳にはいかない

かな。」

「貴様、記憶が……？」

「まずは、そこからだ。俺は、記憶喪失じゃないんだ。」

「！？　なんだとっ！」

「き、きちんと言わなくて悪かったと思ってる！けど、あのときエヴァを前にして、記憶喪失にした方が都合が良かったんだ。」

「都合が良いだと？」

俺は、意を決して話し出す。

「……俺は、転生者なんだ。」

「転生、者？」

「そう、転生者。俺は別の世界、いや、別の次元の人間だった。――」

俺は、その次元には魔法先生ネギま！という漫画があること、その内容、

その次元で死んだこと、アテナという存在に力を与えられたこと、そして転生し、エヴァに拾われたんだと話した。

「――…、あのときエヴァが記憶喪失っていう俺にとっては都合の良い設定を漏らしてくれたから、それに乗ったんだ。」

「それではそのアテネとか言う女が？」

「うん、俺を真祖の吸血鬼にしたんだと思う。これは本当に知らなかったただけだね。」

「そうか……。そしたら、その魔法先生ネギまとか言うふざけた漫画には、私達の今後がかかれていると言うのか？」

「そうだろうね。けど、アテネもこの世界のことを平行世界と称していたし、何より俺が転生して、エヴァやら学園長やらと繋がりをもっているから、必ずしもその通りと言う訳じゃないと思う。」

「成る程……。ということは貴様はこれからこの世界の成り行きを知っている、という事だな？」

「実は……。そうでもないんだよね……。」

「？ 何故だ。漫画があつたのだろう？」

「俺が読んだのは友達から借りた最初の5巻程だけなんだよね……。三十数巻中の。」

「……は？」

「そうなのだ。今まで言う機会が無かったが、俺はネギまをほとんど知らない。」

エヴァが起こした桜通りの吸血鬼事件くらいまでだ。

「まあ、いいじゃない。先を知ってる人生程面白くないものはないでしょ？」

「まあ、それはそうだが……。」

「それより、エヴァは俺が転生者だって言ってもそんな驚かなかったね？」

「フン、元々人外やら人外めいた奴等がここにはうじゃうじゃいるのだ。今更転生者と言われたところでどうってことない。」

それを言うなら、とエヴァは続けた。

「貴様こそ吸血鬼だと言われたというのに余り狼狽えなかったではないか。」

「うーん、頭が混乱してたつて言うのもあるんだろうけどね、今はのんびり生きていけばいいかなって思ってるよ？」

「……っ、貴様は！」

いきなりエヴァが叫びだした。

「貴様は、不老不死ということの残酷さを判っていない！折角親しくしてきた友人も何もかも、目の前で失うことになるのだぞ！」

「…………。」

「周りは老け、朽ちていくのに自分は育つこともない！それだけで周りは敬遠する！だから私は一人でこの六百年間生きてきたのだ！」

普段は絶対に人に話さないであろう、エヴァの想いが勢いに任せて吐露される。

恐らく俺の無責任な発言と、同じ種の存在がいたからだろう。しかし俺は、本当に不老不死に対して絶望感を持つてはいない。

「それを、貴様は…………っ！」

「けど、俺にはエヴァがいる。そしてこれからのエヴァには俺がいる。」

「…………っ！..」

「そりゃあ、誰だって孤独には耐えられるものじゃない。けれど、俺には仲間がいる。エヴァにもできた。」

説教っぽいことは苦手なんだが、ここは続ける。

「同じ穴の貉、とも言ったりするしな。俺はこれからエヴァと一緒に生きていくことができて誇りに思うぞ？」

「…………。」

「それともこんな俺じゃ不満か？」

ならしょうがないな、と苦笑する。

「不満じゃ、ない……。」

か細い声でそんな言葉が聞こえてくる。どうやら泣くのを堪えているようだ。

そんなエヴァを抱きしめ、頭を撫でる。

「そっか。……エヴァ、知ってるか？今ここには俺とお前以外ないんだぞ？」

「……っ、」

エヴァは、遂に声をあげて泣き出した。

恐らくは、こんな姿を見せたことは一度もないのだろう。短期間で信用してくれたという証だろう。

それから数分間、エヴァは泣き続けた。

ずっと泣いていたエヴァは、いきなりパツと体を離すと、妙に服を正す仕草をしながら言った。

「さ、さて！そろそろ桜咲を呼んでやるとするか！」

「いきなり恥ずかしくなったからって突き飛ばさないで下さいよ、エヴァさん。」

「う、うるさいっ!!」

「はいはい、師匠に悟られたくないならその目の腫れを何とかした方がいいと思いますよー。」

「!! ま、待て! まだ呼ぶな! おい! 待てと言っているー!」

「おい師匠ー。」

「待てー! ーっ!」

その後、気を遣った態度を示す師匠に、エヴァは余計恥ずかしさが募ったようだった。

第5話（後書き）

エヴァフラグビンビンです。

ヒロインはどうかやらこれから増えていくことになりそうですねー。
俺としては運動部をいれたいところ。

それでは、また次話でお会いしましょう。

第6話（前書き）

今回はちよつと長め。

海翔君順調に原作キャラと遭遇。

第6話

「魔法先生になってみる気はないかの？」

「……は？」

そろそろ春を迎えるある日、遂に学園長がおかしくなった。

第6話 出沒！まほらパパラッチ！

エヴァの涙から一ヶ月が経った。

魔法も順調に覚えてきているし、神鳴流も、気こそまだ使いこなせないが形にはなってきたしていると、この前師匠に誉められた。

それと、俺が転生者だと言うことは、師匠や学園長、高畑さんにはばらしてしまった。

エヴァが味方してくれると言っていたのが大きかったんだけどな。皆寛大な態度で受け入れてくれたのは嬉しかったな。

そんな頃、俺は学園長室に呼び出された。

そこには高畑さんもいて、渋い笑顔をみせていた。

冒頭の会話は、俺が学園長室に入っですぐ伝えられたものだ。

「いやいや、待ってくださいよ……、俺が教師？」

「そうじゃ。」

いや、そうじゃ、じゃなくてだな……。

「実は、というよりは、海翔君はもう知っているね。新学期から教育実習生として、ネギ君が麻帆良に来ることが決まったんだ。それでネギ君の補佐をしてくれる人を探していたんだ。」

「それで俺に白羽の矢が立った、と？」

「そう、海翔君は魔法も剣術も順調そうじゃないか。適任じゃないかと思ってるね。」

「いや、戦闘方面の補佐なら教師にならなくても良いんじゃないですか？ていうか労働基準法違反じゃないんですか、コレ。」

「フォツフォツ、大丈夫じゃ、ネギ君も10歳程じゃからな。」

いや、知ってるよ。けどその方が問題だろ。

「高畑さんじゃダメなんですか？」

「僕も最初は自分で、と思ったんだけど、どうしても僕は出張が多いんだ。」

「けど、教養過程も取ってないただの並の高校生みたいな俺が教師をしちゃまずいと思いますけど……。」

「裏を返せば中学程度の勉強なら出来るといことじゃろっ？」

裏を返すな、もっと根本的な問題だ。

……けど、どうやら学園長は俺を引き込む気満々のようだ。

高畑さんも説得してくるってことは概ね了承してるということなんだろう。

そして今の俺には残念ながら、この二人に歯向かえる強さも権力もない。

「はあ……。わかりましたよ、やります。」

「おお、やってくれるか！」

やってくれるか！じゃないだろうこのぬらりひょん。

恨めしい視線をジトーツと学園長にぶつける。

「フオツフオツ、そう睨むでない。では、ネギ君が到着する頃にまた呼ぶからの、よろしく頼むぞい。」

「わかりました。」

半ば納得はできてはいないが、諦めて学園長室を出た。

2-A、後の3-Aに副担任として関わっていくのなら、どっちにしろ戦闘訓練は重要になってくるな。エヴァの処に戻って修行を再

開させよう。

「そこのおにーさんっ。」

うーん、となると斬魄刀の解放も重要になってくるな。いつか解放させるきっかけがあれば良いが……。

あれか、対話ってやつをした方が良いのか？

「そこのおにーさん！」

「うおっ、なんだいきなり。」

「いやあ、呼んでも反応してくれなかったもんで。」

たはは、と頭を掻きながらフレンドリーに話し掛けてくる赤髪の少女。

こ、こいつあもしや……、

「私、麻帆良中新聞部の朝倉和美っていうんだ。ちょっとお話聞かせてくれない？」

……。

「戦略的撤退！！」

「待てい！」

腕を捕まれた……だと……？

「なんで逃げんのさー。お話聞こうとただただだよ？」

「新聞部って言ったら記者だろ！記者って言ったら根掘り葉掘り聞くだけ聞いて、ありもしないことをでっち上げる狂気の職業だろ！そんなやつに話す話なんかあるかー！」

「なにその理屈！？そっちの方が失礼じゃない！？」

「煩い！そういうわけで俺は逃げる！」

「させるかー！！」

——しばらくお待ちください——

「くっ、小娘のっ、癖に、やるじゃないか……。」

「まほら、パパラッチをつ、舐めないでよね……。」

数分間の鬼ごっここの末、結局息も絶え絶えの朝倉に捕まった。

「何？おにーさん、記者に、悪い想い出でもっ、あんの？」

「いや？別に。俺が息切らしてたのも演技だけだね。」

「ちよっ！？じゃあなんで逃げたのさ！」

「朝倉……、その場のノリって、あるじゃん？」

「うわー、何それ。じゃあ私走り損じゃん。」

「走って記者お得意の足早質問をさせないっていつ目的もある。」

「なん……だと……？」

「気を取り直しまして、

「じゃあいくつか質問してもいい？」

「あ、その前に。」

「どうしたの？」

「なんで俺なんか取材してんの？」

「ああ、その事。一ヶ月くらい前、うちのクラスのエヴァちゃんと学園長室入っていったでしょ？あれ、目撃されてたみたいよ？」

「ああ、目撃ってより、衆人環視の中だったけどな。」

「その話聞いたときからおにーさんのこと気になってたんだけど、その後中々みかけなくてさあ。」

成る程。やっと見付けて取材をしにきたってわけか。

「じゃあ質問するよ？」

「おう。」

「お名前と年齢は？」

「東雲海翔、17歳。」

「じゃあ次、――」

好きなものや嫌いなもの、他愛のない質問がいくつか進んだ。

くっ、このマシンガンを止めるために走ったと言うのに効果なしかっ！

「――次、今日も学園長室に行ってたみたいだけど、何の用で？」

あー、それか。まあ後でどうせわかることなんだしいいか。

「俺、新学期から君のクラスの副担任になるんだ。」

「へえー、じゃあっ……って、ええっ!？」

「おー、驚いてる驚いてる。」

「え？だって17歳なんでしょ？高校生なんじゃないの？」

「事情があつて高校は通つてないけどな。……はあ、なんでこんなことになつたんだろうなあ。」

「流石麻帆良、なんでもありなんだね……。あ、でもなんで私のクラスってわかつたの？私クラス言つてないよね？」

「さっきエヴァと同じクラスだつて言つてたでしょ？」

「あつ、そつかそつだね。」

「このことは内緒にしておいてくれよ。」

「ええつ、今日一の大スクープなのにい。」

「ふつふつふ、朝倉君。取り引きする気はないかね。」

「瞬でキャラを変え、朝倉釣りを開始する。」

「と、取り引き……。」

「今のと、この取り引き材料のネタを秘密にするという契約で、とっておきのネタを提供しようじゃないか。」

「う、うつつ、……でもそれも秘密なんでしょ？」

「そうか……。いらないのか。じゃあお預けだな。」

「うつつーっ！するつ、秘密にするからそのネタ教えて！」

「フィィッシュー！！ふはは、楽勝楽勝！」

え？何キャラだって？俺だってわかってないわ。

「で、そのネタってなんなの？」

「実はな、——」

俺はネギが来ることも話してしまうことにした。

別に魔法を秘匿にすればいいだけだし、ネギが来ることはいずれやってくる事実なんだし。

秘密にしてくれるっていつてるんだし、ここはとびきりのネタ（餌）を与えることにする。

「——…ってことで、新学期には、10歳の担任が来ることになってるんだ。」

「10歳！？凄いなそれは。高校生の海翔君ならまだしも、授業できるのかな？」

「ウェールズの学校を首席で卒業したらしいぞ。担当は英語らしいから、ネイティブでいいんじゃないか？」

「首席！それはスーパー10歳だね。」

ネギまの物語の冒頭を暴露したところで、そろそろ時間が結構過ぎている。

「さて、そろそろお暇してもいいかな？」

「あ、そうだね。ありがとう取材させてくれて。とっておきのネタも入ったし。」

「おいおい、秘密にしてくれる約束だぞ？」

「うん、わかってる。そういう約束は守るよ私は。」

「よし、それじゃあな。」

また取材させてねー、と手を降る朝倉に手を振り替えし、エヴァのログハウスへと戻っていった。

第6話（後書き）

という訳で朝倉話。

しかし彼女が海翔君のこと好きになるかどうかは微妙です。
良い友達で終わりそう。

次話はまだ原作には入らないと思います。
もう少し書けるぜ……！

それでは、次話でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8136y/>

魔法先生ネギま！－ある転生者の物語－

2011年11月30日01時06分発行